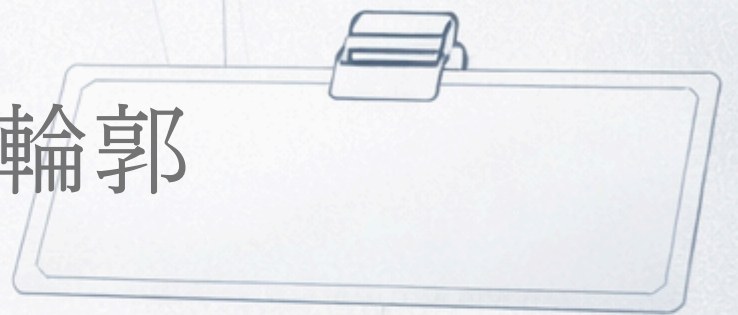


外注された輪郭



名前が与えられたときだけ、  
形になる輪郭がある。

何をしているかより、  
どう呼ばれているかが先に届く人がいる。

仕事内容ではなく、  
肩書きが先に差し出される。

それは、外から見たときの  
かたちのほうだった。

虚栄ではない。  
見栄でもない。

怠っているわけでも、  
足りないわけでもない。

むしろ、整っている。  
与えられた評価に、よく応答している。

ただ、  
名前のない状態が、持続しない。

輪郭は、内側で保たれていない。

役職。

所属。

履歴。

それらに触れているあいだだけ、  
かたちは安定する。

離れたとき、  
境界がわずかにほどける。

そしてその揺れは、  
立ち方の輪郭にそのまま出る。

呼ばれたい。  
ただ、その呼び名の内側には収まりきらない。

与えられたい。  
ただ、それに沿って固定されると、滲む。

外から与えられた形と、  
そこに収まりきらない部分が、同時に残る。

そのまま、少しだけ曖昧な輪郭で立つ。

外されたあとも、  
同じ輪郭で立てるかは、  
どこにも置かれていない。



Edition — 存在の芯  
別景：外注された輪郭

著者：美学思想家 古川玲奈  
発行：Raffiné  
2026